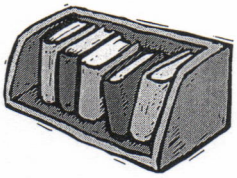
るかについて，学会発表や論文投稿を行った。日ごろ，社会的弱者に対して健康的なフォローを行っていれば，病態が悪くならずにすんだのではないかとの問題提起も行った。私が勤務していた病院では，今も公園で社会的弱者に対する健診などの取り組みを行っているが，官民一体となった取り組みが大切ではないだろうか。

話をもとに戻す。DPC の取り組みにおける最大のメリットは，何といっても他医療機関とのデータ比較であろう。それによって大学，医療機関，企業など，さまざまなグループにおける研究会活動の結果，臨床指標の構築，クリニカルパスへの応用など医療の質向上へとつながると考えられる。

では，具体的に DPC データをどのように利用したかを次回に述べる。

（おがた・のぶあき　福岡市在住）

書籍



『子宮頸がんワクチン、副反応と闘う少女とその母親たち』

黒川祥子・著　集英社　2015 年 6 月 26 日発行
四六判　320 ページ　1,600 円（税別）　ISBN-978-4-08-781568-9

本書の概要は，帯封裏に次のように記載されている。

少女たちを守れない社会に，未来などない。日本で 338 万人が打ち，未だ打ち続けている「子宮頸がんワクチン」。それを接種した結果，少女たちに何が起こったのか―。第 11 回開高健ノンフィクション賞受賞作家が，今まで誰も踏み込まなかった 6 人の少女たちの日常を取材。想像もできないような，さまざまな症状に脅かされながら，健気に闘い続ける娘と，その母の姿を追った。さらに産婦人科医師，治療する医師，厚生労働省などの証言も加え，「子宮頸がんワクチン」問題を多角的に検証。これは決して「対岸の火事」ではない。

また，帯封の表には，「すべての母親が読むべき一冊！　少女たちの涙に胸が裂ける。激痛，記憶障害，眼振，痙攣…「子宮頸がんワクチン」後遺症の全貌がここにある。（石田衣良氏・作家）。

著者の黒川祥子（くろかわ・しょうこ）氏は，1959 年生まれ。福島県出身。東京女子大学文理学部史学科卒業。弁護士秘書…業界紙記者などを経て，フリーライターに。家族の問題を中心に執筆活動を行う。（以下，著書など割愛）。

本書は，「子宮頸がんワクチン」（以下「HPV ワクチン」）接種後に，石田氏が「激痛，記憶障害，眼振，痙攣」と書いたような諸症状を起こした 6 人の少女とその母親たちへの取材記事を中心に，各章の合間に，被害者団体支援者，研究者，専門医，産婦人科医師へのインタビ

ュー記事を「証言」として加えるという構成をとっている。

6 人の少女は，北海道，首都圏，近畿地方…と全国各地に居住している。実名を公表しているのは，「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」会長の松藤美香さんとその娘の真衣さんだけであり，5 人は「仮名」であり，年齢は，面接時に 14～17 歳である。

読者は，「ワクチンの副反応」と考えられる，種々の激しい，深刻な症状に驚きを禁じえないであろう。第 1 章の三咲あすかさん（14 歳）は，3 回目のサーバリックス接種後，「ハンマーで殴られるような」頭痛，不随意運動，味覚・嚥下障害，「父に脅える」記憶障害，痙攣等々。

第 2 章の菅沢奈緒子さん（15 歳）は，「ハンマーでがんがん叩かれているような」頭痛，眼振，めまい等々，思い出しても“忘れ波”が来てまた記憶がさらわれ」，「赤ちゃんのようになる」記憶障害に苦しめられる，といった具合である。

「証言三」に登場する西岡久寿樹医師によれば，「ある少女は，36 の症状が出ている。別のケースでは，61。足の痛み，過呼吸，計算障害，疲労感，痺れ，記憶障害，学力低下，全身疼痛，不随意運動，めまい，発熱，下痢，便秘，光過敏，突発性睡眠，音過敏…この症状が治まったらまた別の症状というふうに…。」こうした多様で深刻な臨床症状の解析は，横田俊平ほかの論文[1] 等を参照されたい。

同時に，そうした諸症状が，生活の場でどのように現われているかを知るには，本書のようなルポルタージュ式の報告を読むのが適当といえるだろう。被害少女と母たちは，前代未聞の多彩で深刻な症状を克服すべく，健気にも日夜苦闘を重ねてきているのである。

前記の菅沢奈緒子さんの実家は長野県だが，「酵素風呂」に朝晩 2 回入り続けるために，東京近郊のホテルに連泊して，治療に通った。4 日目に立ち上がることができるようになり，2 週間後には，つかまって立って歩くことができるまでに回復したという。

第 3 章記載の神奈川県の萩原葵さん（17 歳）は，2014 年 2 月からステロイドパルス療法を受け，6 月からは別のクリニックでビタミン点滴（ビタミン C とか，グルタチオンなど）を定期的に行い，一定の改善をみた。（但し，月 4 回のビタミン点滴とサプリで月額十万円を要したという）

実名で取材を受けた「被害者連絡会」会長の松藤美香さんの娘さんの真衣さん（16 歳）は，2015 年 2 月中旬から 1 か月入院し，B スポットという治療を受けた。美香さんの話では，「退院後は，突然倒れてしまう解離という発作がかなり減り，痛みも劇的にやわらいでいます。ビタミン点滴をすることも，車いすも必要なく過ごしています。体調のいい時には走ることもできるようになりました。まだ頭痛や軽い不随意運動などは出ますが，6 割程度は良くなってきました。このまま，もっと良くなることを願っています」（316 頁）

被害者連絡会が製薬会社と厚生労働省に求めている全面解決要求は，以下の通りである。「健康被害の全体像把握のための調査，治療法の確立，治療に専念できるよう医療費の支援，無理解・偏見が解消されるような正しい情報提供，すべての被害回復にふさわしい賠償である。一刻も早く，被害者がすべてを享受できるようにしなければ，刻一刻と悪化していく少女たちばかりか，支える家族もつぶされてしまう」（306 頁）

とりわけ，治療法の確立は急務だ。評者は，松藤さんらからの情報と，「医薬経済」誌に紹介された，仙台の堀田修医師の B（鼻）スポット治療（上記）が，被害者間で話題になっていることを知り，堀田医師らに，その治療の実態と，治療の成績を直接伺った。

その結果，治療自体は，炎症を起こしている鼻咽腔（B スポット）を，塩化亜鉛溶液を沁み込ませた綿棒で擦過（こする）という簡便な方法だが，重篤・多様な症状を呈している患者さんの場合は，入院してもらって濃密な治療を行う必要があること，これまでにそうした治療を実施した HANS の患者さんは 16 人で，そのうち 13 人（約 8 割）が改善し，うち 4 人は「完治した」との情報を得た。

堀田医師は，こうした内容を，他の医師ら 4 名と連名で，2016 年 4 月にドイツで開催される国際会議で発表の予定ということである。こうした研究が倫理的・科学的に行われ，国際的批判に耐える内容となることを切に願う次第である。B スポット療法については，「古典」となる文献を参照されたい[2)]。

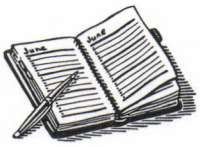
参考文献

1) 横田俊平ほか「ヒト・パピローマウイルス・ワクチン関連神経免疫症候群の臨床的総括と病態の考察」日本医事新報，4758 号（2015 年 7 月 4 日）.

2) 堀口申作 「原因不明の病気が治る：Dr. 堀口の『B スポット療法』」光文社，1984 年.

（片平洌彦）

女性が働くとき （10）



女性の格差は年金にも

寺岡敦子

年金引き下げ反対の裁判

2015 年秋，全国で 4,000 人超の人たちが原告となって，「年金引き下げ違憲訴訟」が始まりました。これは 2013 年から実施された年金給付額引き下げの違法性・違憲性を訴える裁判です。原告を支えるのは全国年金者組合で，現在 10 万人以上の組合員がいます。

年金給付額は足りているか

この年の 6 月に 71 歳の男性が走行中の新幹線「のぞみ」車内でガソリンを撒いて自殺し，居合わせた乗客らに死傷者が出ました。容疑者は事件の前に，「今の年金では生きていけない。」と年金への不満を漏らしていました。

2013 年度末の公的年金受給者は 3,950 万人ですが，このうち国民年金だけの受給者は 784 万人で平均月額は 5 万円程度です。厚生年金受給者では，全体の 25%の人が月額 10 万円未満で，女性はさらに多く 52%が 10 万円 未満です。

年金制度の変遷

わが国の年金制度の実態を調べてみました。1973 年の石油危機に始まる経済危機により，